



子どもたちの明日

Children, Our Future

2006年8月 NO.78



大分県立大分南高等学校の子どもたち（左から順に）

目 次

- ① 今、世界の子どもが抱えている世界の貧困から書かれた現実
- ② 「貧民ハレリア」 貧民の生活がどうなっているか
- ③ 赤い糸の物語、大分県立大分南高等学校の子どもたち
- ④ 貧民ハレリアの物語（大分県立大分南高等学校の子どもたち）
- ⑤ 大分県立大分南高等学校の子どもたち
- ⑥ 大分県立大分南高等学校の子どもたち

雑誌「子どもたちの明日」の発行に協力している機関： 協賛先
大分県立大分南高等学校の子どもたち（左から順に）

今、都市の子どもが危ない！

「ケマラの保育所から見えてきた現実」

近年、カンボジアでは現金収入を求めて都市へ移動する人が増えています。しかし仕事は限られるため、プノンペンには、約700ヶ所のスラムがあるとされます。そこに住む人々は、そ

の日暮らしの厳しい生活にあり、売春宿に隣接した地域では、HIVエイズの感染者も少なくありません。夫婦共稼ぎで働きに出るため、子どもたちは幼い兄弟と共に放置されています。

今、子どもたちに必要なもの……それは安全で、安心して過ごせる場所です。



ゴミ山で売るものを拾う少女
© 小林正典

ケマラは、カンボジアの初のNGOとして1991年に女性と子どもを支援する活動を始め、プノンペンの低所得者が多く住む地域で2つの保育所を運営していました。ところが2002年、深刻な資金難に陥り、約100人の子どもたちが通う保育所を閉鎖せざるを得ませんでした。

ケマラより要請を受けたCYRは、保育所を失った子どもたちと保護者にとって、保育活動の再開は緊急を要するものと判断して、2保育所の再開に協力しました。CYRがケマラと共に歩んだこれまでの3年間を振り返ります。

1 年目 (2003年)

子どもの笑顔、保育所へ再び

CYRとケマラの保育者は、何度も打ち合わせを重ねて保育所再開の準備を進めました。2保育所のうち、マピアアップ保育所が5月、スピエンクボ保育所が6月に再開し、合計54人の子どもが通えるようになりました。

スピエンクボ村では保育所を補修する間、地域の民家で保育が再開され、さらに地域で保育所の運営をサポートする委員会も動き出しました。

2 年目 (2004年)

1日15円の給食費が出せない保護者たち

将来の自主運営を目標に、委員会の運営力を高めることが大きな課題でした。保護者には1日約15円の給食費をお願いしましたが、日雇い収入で精一杯というこの地域では、この負担が難しい状況でした。CYRは、登録児数40名以上を条件に給食費(月\$25)の支援を開始しました。一方、農村の保育所との交流も始め、保育者たちは、水浴び・歯磨き・手洗いなどに力を入れてきました。

二年目の成果は、登録児数の増加、保育者の仕事への熱意が向上したことが挙げられますが、委員会の管理・運営力を高めることは困難でした。

3 年目 (2005年)

子どもの数が増え、環境が整う

委員会が保育料・給食費の徴収率の向上に取り組む一方、CYRは、地域の生活実態を知るため、保育者とともに家庭訪問調査を開始しました。

保育所には花壇、砂場がボランティア活動により整備されました。CYRはブランコ、回転椅子を設置した他、遊具・教材の研修協力を続けました。

三年目の成果は、ケマラがお米・魚醤・醤油・塩・現金など、保育所への寄付を毎月自分たちで集めたことが挙げられます。反面CYRの給食費支援に依存する傾向も見られました。

表で見る保育所の変化(年度の平均)

	2003年	2004年	2005年
登録児数(人)	55.6	78.2	103.4
給食費徴収率(%)	31.2	40.6	31.2



上：手洗から病気を防ぐ マタピアアップ保育所
 右：給食は大切な栄養の源 マタピアアップ保育所
 左：広場で遊ぶ子どもたち プノンペン
 © 小林正典

ここで見放せない、 都市の厳しさ

現在、ケマラは支援者拡大の取り組みを続けています。しかし、カンボジアのNGOにとって自力で資金集めをするのはとても難しいのが現状です。当初の支援期間である3年は終了しましたが、CYRは今後、研修や教材・遊具施設の充実など側面的な支援を1年間続ける予定です。

CYR だからこそ出来る活動は何か・・・ 「考える」過程を大切に

CYRは、ケマラの支援を通して都市の貧困層の家庭状況や、幼い子どもたちの生活環境、その厳しい現実を目の当たりにしました。家庭訪問調査では、保育所の必要性や子どもの変化を喜ぶ保護者の声をたくさん聞きます。さらに、保護者がもっと働くことが出来るよう、週末も保育所を開いてほしいとの要望も寄せられました。遠方から出てきた保護者には、近くにあまり知り合いがなく孤立しているという問題も感じます。

CYRは、この周辺地域で約200軒の家庭訪問調査を続けます。そして、地域の問題や母親・子どもたちの現状を探り、「考える」過程を大切に、子どもたちのための新しい事業を検討していきます。

この活動は、自治労福岡県本部のご支援を受けています。現地視察を行った江崎さんに活動の評価をしていただきました。

地道な活動が いつかきっと国を変える

自治労福岡県本部書記長
江崎 孝

今年3月に保育所を訪問した時、子どもたちの表情が知的で、出迎えてくれた遊戯にも努力の跡が伺えました。これは明らかに保育所が地域で認知され、ケマラと保育者さんたちの運営や指導に対する自信とスキルが向上していると直感しました。

また、運営委員会は1年目と比べて機能化してきていました。それは保育所で学ぶことによって変わる子どもを通して、今度は親たちが変わってきた証でもあるでしょう。内戦や貧困等を原因に教育の機会を得るのが難しかった親世代が、学ぶことに関心を持ち始めたとすれば、このプロジェクトの意義は大きいものと言えると思います。このような地道な活動が、いつか大きなねりとなってカンボジアを変えることを期待しています。

福岡県本部は、決して一過性ではない、カンボジアの将来につながる長期的支援を望んでいます。そのためには、私たちの支援金が誠意を持って事業に活用される信頼の高い団体との連携が不可欠と考えます。その意味で、CYRの誠意ある活動に感謝するとともに、今後とも私たちとカンボジアをつなぐ重要な役割を担っていただくようお願いしたいと思っています。

長年親しまれてきた

「保育ハンドブック」

待望の復刻版がついに完成！

表紙に輝く瞳の子どもたち、本文はイラストと子どもの写真入りで114ページ。これが今回新しく復刻版が完成したCYRの「保育ハンドブック」です。



15年前、 難民キャンプでデビュー

オリジナル版は、1992年7月、カンボジア難民キャンプで出版されました。CYRは、キャンプで開いていた保育センター「希望の家」での活動から、子どもたちが普段の生活や遊びの中で、どう発達していくのかを分かり易く説明した保育ハンドブックを作成しました。

この本の出版事業には、70名を超えるスタッフとボランティアが関わりました。当時、他の難民キャンプにも配布され、広く使われてきた一冊です。

復刻版、 今後の活躍に期待

CYRは、カンダール州の全公立幼稚

園を対象とした保育者研修に協力して3年目になります。研修を広範囲に実施している現在、このハンドブックを使いながら子どもの成長にとって大切なことを伝えていきたいと考え、今回2000部を復刻しました。

今後、地方の公立幼稚園の保育者研修や、村の保護者会で積極的に活用する予定です。

ハンドブックに 込められた思い・・・

ハンドブックの序文はこう述べています。「難民キャンプという環境を唯一の世界として育つ子どもたちが健全な成長を守るよう、カンボジア人の親や若い人々が指導するために、このような手引きが必要でした。」当初

から難民キャンプだけではなく、キャンプを離れ、村で暮らすようになった母親や保育者にも伝えることを視野に入れて作られたハンドブックは、現在でも広く通用する内容です。

この中には、子どもたちが健全に成長していくためには大人の配慮が大切であることが随所に述べられています。また、文字の読み書きが不自由な人のために、写真や手書きのイラストを多用しています。

*この事業は、東京都の助成他を得て実施しました。

ハンドブックの中身を見てみよう！

① 水を注ぐ

水が缶からこぼれて土の上ではねて地面をぬらし、色が変わるのを一生懸命に見る。水と土の性質を学んでいる。子どもは、五感を使ってまわりの世界を学ぶ。



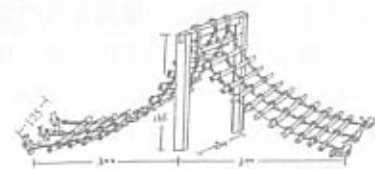
② 食品の3大要素

体をつくる「たんぱく質」、エネルギーの源となる「炭水化物」、身体を病気から守る「ビタミン類」などをバランスよくとることが大切。



③ なわばしこの作り方

簡単に入手できる材料を使い、遊び方とともに紹介。竹棒の太さが子どもたちの手の大きさに合うように設計されているなど、様々な配慮がされている。



あれから

約 400 日

スマトラ沖大地震 タイ

タイ津波被災地は今・・・



津波発生より約400日経った今。続々と駆けつけた海外援助団体のほとんどは一斉に引き上げ、人々の記憶からはあの惨事が遠のいていきます。しかし、被災地では今も地元の人々はそこで生活し、様々な困難に向き合っています。緊急時が過ぎた現在も活動を続けているのは殆どが現地の団体で、被災した人々の心のケアにあたっています。2006年3月末、カンボジア事務所長の関口晴美が3度目の現地訪問をしました。以下、関口によるレポートです。

被災地は今・・・

復興が進んできている印象を受けた。食堂のお客さんたちの車輦にも新しいトラックが増えている。海岸沿いのリゾート地には観光客が戻ってきているようだ。前回の訪問から8ヶ月が経過。しかし人々の心の傷はすぐには癒えない。CYRは、タイNGOラバットバイやサハタイ財団等を通して、子どもの施設への資金援助と、保育遊具・教材の配布とトレーニングに協力している。

若者のパワー、未来を創る

ラバットバイは、被災地で若者による子どもの心のケアにあたっている。今回は、彼らのキャンプ活動を見学したことが大きな収穫だった。ラノー県スックソムラン郡タレノ村は、海岸沿いに位置し、47名が津波で亡くなっている。親や友だちを亡くした子どもがいるが、ラバットバイの活動により、自分なりに村の復興を考え始めていた。子どもたちや地域の人々との信頼関係も根付いてきている。現地のパートナー探しに時間をかけた甲斐があった。ラバットバイは今年、CYRの支援を受け、保育者などを対象に年2回のワークショップを開き、10個所の保育所、幼稚園の子どもたちとの活動を計画している。



国を超えて通用する遊具・教材

CYRがカンボジアで使っている遊具・教材を持参したところ、タイの子どもにも喜ばれたことはとても嬉しい。長年保育活動に携わってきたが、子どもにとって必要なものは、たとえ場所が違っても共通していることを再確認した。

また、文化の違いを教わることもあった。被災地に住む人の中にはイスラム教徒もいる。人間の形をした人形には死者の魂が宿ると考えられているため、子どもたちは人形で遊ばないとのこと。こうした違いは大変興味深かった。



これまでの支援

- 2005年2月
CYR元タイ人スタッフの協力で、子どもの状況とNGO活動の情報を収集
- 2005年4月
プーケット、バンガー県、ラノー県の被災地調査
- 2005年7月
バックリウム村子どもセンター訪問、タイNGOラバットバイへ資金援助
- 2006年3月
ラバットバイへ教材提供・資金援助
子どもセンターへ昼寝用布団等寄付

今後の検討支援

- サハタイ財団と協力し、ラノー県スックソムラン小学校で、教師が建てた幼稚園へ外遊具を支援
- ラバットバイ、県社会福祉局と協力し、ラノー県で、津波後に建設された保育所へ外遊具と垣根を支援

* 次回のCYRの現地訪問は7月に行う計画。9月以降、支援継続が必要かどうかを検討していきます。

* この事業は、全国社会福祉協議会、毎日新聞希望のネットワーク他、多くのご支援を得て実施致しました。

カンボジアとつながる！新ボランティア企画スタート みんなで布チョッキン

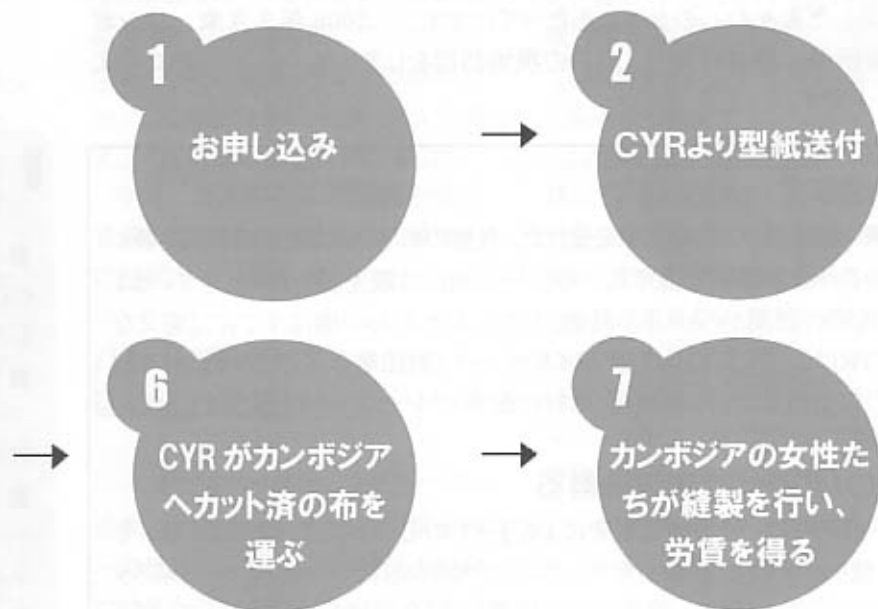
- カンボジアの子どもたちへ人形とボールを -



© 小林正典

カンボジアの子どもたちに大人気の「人形」・「布ボール」。この遊具づくりを日本のみなさまに手伝っていただく新たなボランティア企画が始まりました。日本で遊具に使用する布を集め、「人形」や「布ボール」の型紙に沿って切る活動です。開始から約2ヶ月。企業や組合・学校などによる取り組みの輪が少しずつ広がっています。

目標 600 個



布チョッキンの目的

ひとりでも
多くの子どもたちへ遊具を

カンボジアでは遊具がとても少なく、人形やボールで遊んだことがない子どもたちが大勢います。CYRは、設立当初より26年間、子どもの成長に配慮した遊具や教材を製作・使用しています。また、その目的や使い方などを保育者への研修を通して伝えています。

この度、CYRの人形と布ボールは、広く幼稚園や子どもの施設で使用されることになり、たくさん必要となりました。ひとりでも多くの子どもたちが、人形やボールで楽しく遊ぶよう、日本でのお手伝いをお願いしています。

Q どうして遊具をカンボジアで手づくりするの？

壊れても直せることの大切さ

CYRは、保育所の遊具・教材に、できる限り現地で入手した材料を使用しています。そして、そのつくり方や使い方をカンボジアの人に伝えています。そうすることで、支援の手が離れた後もカンボジアの人が修理したり数を増やしたりすることが出来ます。CYRは、1度きりで終わらない協力のあり方がとても大切だと考えています。



カンボジア事務所
保育担当 山極小枝子

このたびの新企画は、CYRに賛同してくださるみなさまと直接協力し合えるので、とても嬉しいです。ボールで遊ぶ環境さえ当たり前ではないカンボジアの多くの子どもたちのために、確実にお届けすることをお約束いたします。



ボールの遊び方研修

募金にご協力をお願いします

1,000円 / 人形1体またはボール2個

人形・ボールを子どもたちのもとへ届けるまでには様々な費用がかかります。募金には女性たちの労賃、糸代、綿代、運搬費、保育研修費などが含まれています。

3

布を集める

4

型紙に合わせて
布を切る

5

カット済の布・募金を
CYRへ送る

8

CYRが使い方を
保育者へトレーニング

9

子どもたちのもとへ



© 小林正典

Q どうして布を切るだけなの？

女性たちへ現金収入を

近年、首都プノンペンでは現金収入を求めて農村から移り住む人が急増しています。しかし、多くは日雇い労働に従事し、非常に厳しい生活を強いられています。

CYRは、人形・ボールの縫製を貧しい女性にお願いすることで、彼女たちに現金収入の機会を提供しています。



人形を縫製する女性

参加者の声

・わたしたちの募金が、カンボジアの女性たちの貴重な現金収入の糧。ただ日本にあるものを提供するやり方ではない新しいボランティア活動に触れることができた。この活動が、着実に多くの人に理解されて仲間が増えることを祈っています。

・カンボジアでは大人もボールの遊び方を知らないと聞いてショックだった。私たちが短い時間で、しかも布を切るだけでカンボジアの人たちの役に立つことができるのはうれしい。

・作業前にスライドで笑顔の子どもの写真を見たことで、とてもやる気になった。自分が作ったボールで子どもたちが実際に遊んでいる様子が見たい。

企業、学校、団体の方へ グループで参加しませんか？

一定時間内で気軽に取り組める参加型ボランティアプログラムとして、企業、労働組合、学校、団体の方々にご参加いただいています。終業後や休日に社員の方々やクラスメイト、ご家族などグループで作業を行っていただきます。ご希望に応じて、CYRのスタッフがカンボジアの事情や、遊具の使われ方などをお話させていただきます。
(2時間程度のプログラム)

今までのご協力事例

- ・自治労千葉県本部
- ・JALグループ
- ・ソラン(株)
- ・三井住友海上火災保険(株)
- ・横浜雙葉高等学校

養子に まつわるお話

カンボジア文化発見

カンボジア事務所スタッフ
ドライバー
チイ・サエン



養子は、真剣に考えなければならない特別な問題である。私たちは、どの子どもも飢えることがないように努力しているからだ。養子は難しくお金もかかるけれど、とても良いことだと思う。普通、養子になるのは親が育てられなくなった子どもである。私の場合、5人の子どもがいたが、孤児たちがとてもかわいそうだった。だから私たち夫婦はその子たちを養うことにした。

妻も私も、養子をとる際に、貧しいかお金があるかなど気にしない。そして、子どもと母親の両方を助けたいと思っている。妻のいここには生後25日の赤ん坊がいた。男の子だった。彼女は、息子をどこかに養子に出したいと言っていた。彼女は離婚して、4人の子がいるため、育てるのが難しかった。彼女が事情を話し終えた時、私たちはその子を養子にすることに決めた。その子は1998年1月21日に、カンダール州で生まれた。子どもを受け取った後、私はすぐに市場に行き、哺乳瓶と粉ミルク、服を買った。その後、予防接種も受けさせた。

私は、社会的に生きていくのが難しく、自分より大変な人を支援するのが好きなので、子どもたちを世話している。そうすれば、彼らの生活水準は前より良くなるのだ。もし彼女が子どもを育てていたら、家族を養っていくのは難しかっただろう。私は、両親が育てられなくなった子どもたちをあと3人支援できる。

CYRの活動をご支援ください

年会費

正会員 ¥10,000 学生会員 ¥3,000 団体会員 ¥30,000

下記の口座にご送金ください。

郵便振替 No.00110-8-36227 (特活) 幼い難民を考える会
銀行振替 三菱東京UFJ銀行六本木支店 (普)No.1351747
特定非営利活動法人 幼い難民を考える会



特定非営利活動法人

幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒106-0046 東京都港区元麻布3-2-20 丸統麻布ビル2F
TEL: 03-3796-6377 FAX: 03-3796-6399
Email: info@cyr.or.jp
URL: http://www.cyr.or.jp

2006年度CYRインターン紹介

東京外国語大学カンボジア語専攻3年生2名を受け入れました。

私は、カンボジアの何とも言えないあたたかさや、人々のやさしさが大好きです。将来は、カンボジアの子どもたちの役に立つ仕事をしたいと考えています。大学でカンボジアについて勉強できることや、CYRの活動に参加できることから、最近自分のやりたいことにだんだん近づいているという嬉しさを実感しています。今感じているこの嬉しさを、カンボジアの子どもたちにも感じてもらって夢を叶えるお手伝いをしたいというのが私の夢です。その夢に近づくためにも、今後CYRで経験することはとても大切な一歩となるものです。

社会人としての常識を身につけると共に、様々な人たちとの出会いを大事に、また色々な物の考え方を自分の中に吸収しながら、人としても一回り大きくなりたいと思います。未熟者ではありますが、大好きなカンボジアのため、子どもたちの夢のため、CYRの一員として一生懸命がんばります。



高山 薫

CYRとの出会いは、昨年『子どもの遊びのカード』の翻訳を私たち学生に任せてくださった時でした。カンボジア語独特の言い回しに苦戦しながらも、みんなで遊びを試している時は、大学生だということを忘れるほど楽しい授業でした。完成した時の喜びはひとしおでした。

その後CYRに興味を持ち、「今日の子どもの幸せが明日の平和な社会につながる」というスローガンや、ものを支援した後のケアに力を入れている活動に共感しインターンを志望しました。今は広報の仕事をしています。記事を書くために調べものをしていて、保育者研修から織物の技術指導まで、その活動の幅広さに目をみはります。職員やボランティアの方とお話するのも楽しく、事務局へ通う日は必ず何かを学んでいます。

常にインターンとして自分ができていることを考え、積極的に活動に携わって、将来は大学で学んできたことやCYRでの経験をもとに様々なバックグラウンドの人と理解し合い、協力し合えるようになることを目指しています。



岩垣 佳江

子どもたちの明日 78号

◆発行日: 2006年6月8日

◆発行人: 深水正勝

◆翻訳ボランティア: 交野茂子、井手和子、大濱里美、北川陽子、
迫田恵里、長岡彩子、中西麻衣子、西脇好、
林桃子